

街から見える札幌の山々

札幌市の西部には標高1000 m 前後の山々が連なり、市街地に藻岩山や円山・三角山が隣接、東部には小山が点在しています。これらの山は、火山噴火や侵食作用などの地質現象によって造られました。地殻変動によって地盤の一部が隆起し、海や川の侵食から免れて山となったのです。

「動かざること山の如し」と例えられます。しかし、山にも一生があって、数百万年以上の超長期間にわたって変化し続けます。

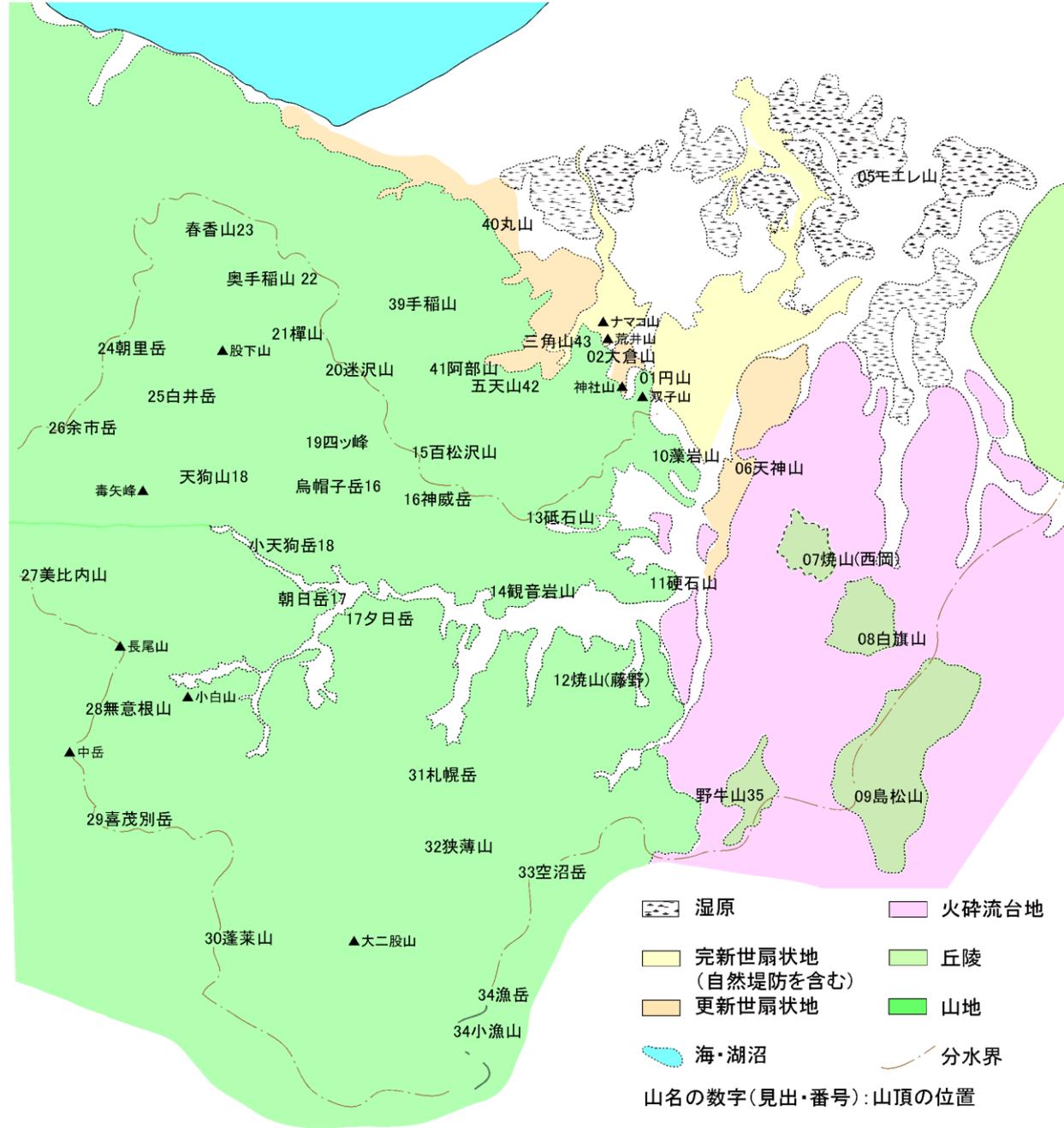
今回の講演では、街から見える山の姿を中心に、アイヌ語山名や山の形成史についても、紹介しましょう。

お話は1時間程度にして、残りの時間は皆様の山の知識をお聞きしたいと思います。

札幌の近郊には、手稲山
 - 迷沢山 - 百松沢山
 - 砥石山とつづく遠山
 <手稲山連山>と、
 それより一段低い三角山 - 大倉山 - 奥三角山 - 幌見峠 - 藻岩山とつづく前山<三角山連山>にわかれています。

前山の手前には<円山や荒井山>が見えていました。

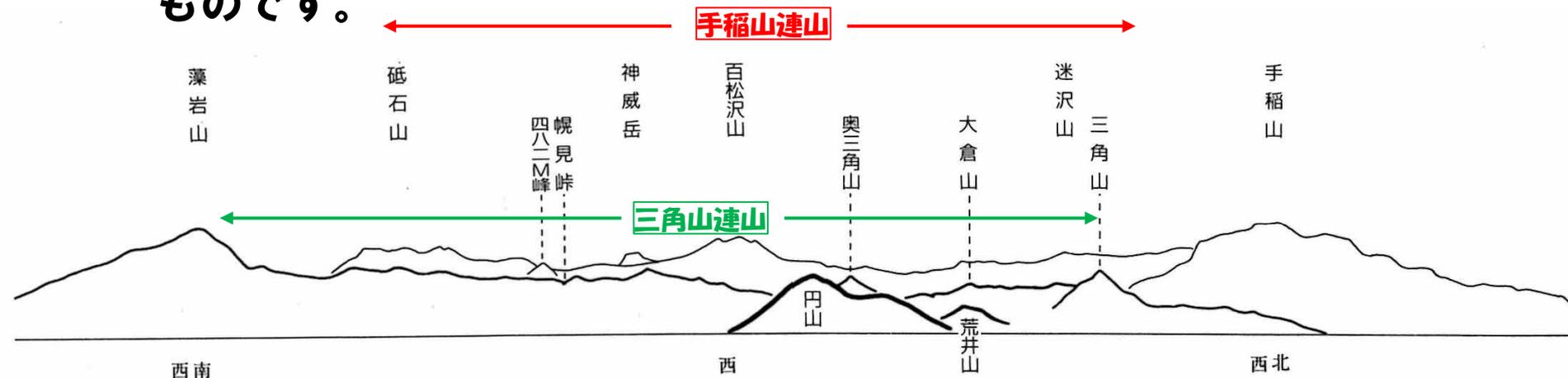
さらに西の奥には、標高1000 mを越す朝里岳・余市岳・無意根山・喜茂別岳などが分水嶺をなしています。



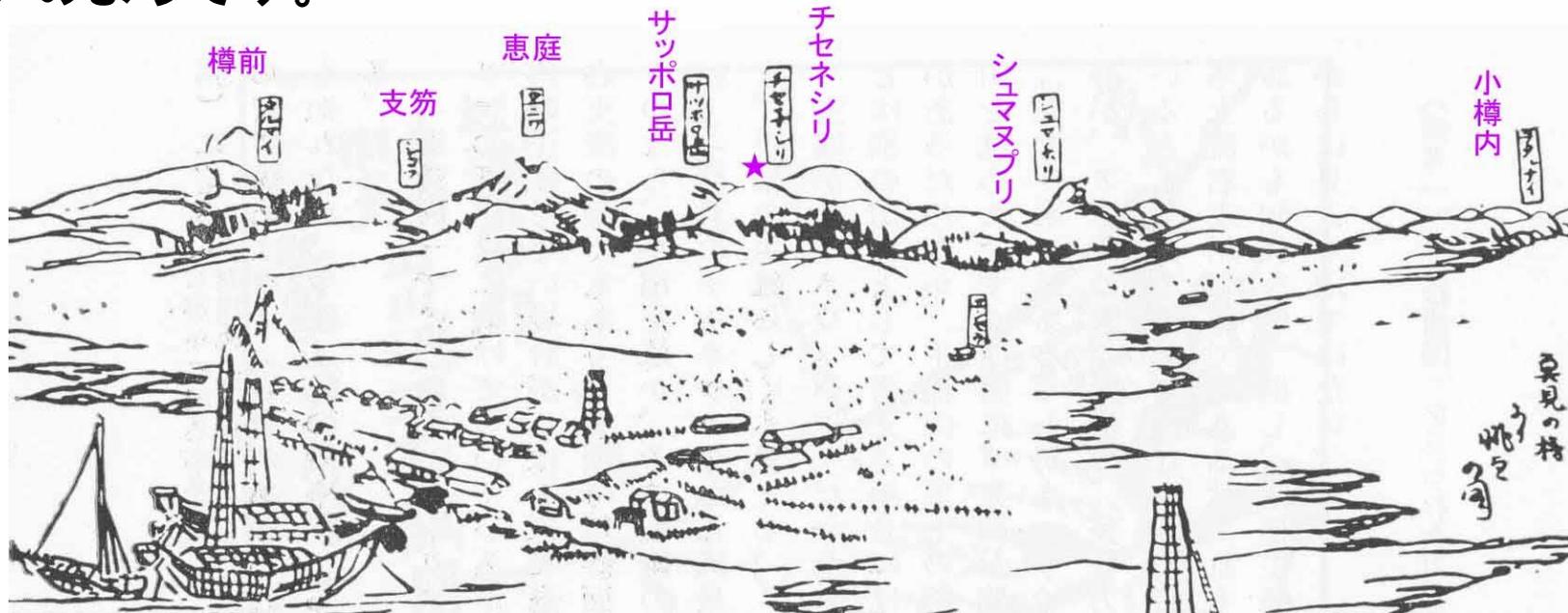
「札幌の地名がわかる本」で紹介した「札幌の山々」

西部の山々は、豊平川の橋へ行くと、見通しが開けて良く見えます。
山岳画家・坂本直行さんのスケッチ「豊平橋から見える山稜」は戦前の風景。

写真は藻岩山から手稲山までの現在の山容を、北13条大橋で撮影したものです。



札幌の山々は、松浦武四郎によって「魚見の檣より眺望の図」として描かれていました。チセネシリは手稲山、プーネシリはネオパラ山（★）のようです。



石狩手稲通から南を見ると、〈手稲山〉（チセネシリ：家のような山）の左に〈ネオパラ山〉（プーネシリ：倉のような山）が見える。

松浦の図と山容は変わらず、まさに“山は動かない”ようだ。